



TITLE:

# 第二次世界大戦期の国際決済銀行 (4) 一諸中央銀行間協力の組織化 1940年-1942年一

AUTHOR(S):

西牟田, 祐二

---

CITATION:

西牟田, 祐二. 第二次世界大戦期の国際決済銀行(4) 一諸中央銀行間協力の組織化 1940年-1942年一. 経済論叢 1999, 163(2): 1-31

ISSUE DATE:

1999-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/45263>

RIGHT:

# 經濟論叢

第163卷 第2号

---

第二次世界大戦期の国際決済銀行（4）……………	西 牟 田 祐 二	1
日韓海峡経済圏（2）……………	鄭 應 周	32
大気汚染に対する課税と土地利用規制（2）……………	鄭 炳 潤	55
女性の就業パターンに関する一考察……………	陳 珍 珍	72
非定常データによる 貨幣需要関数推定とその安定性……………	井 口 泰 秀	93

---

平成11年2月

京都大學經濟學會

## 第二次世界大戦期の国際決済銀行（4）

——諸中央銀行間協力の組織化 1940年-1942年——

西 牟 田 祐 二

### I BIS のバーゼルからの一時疎開と戦時適応の進展

1940年5月10日のドイツによるベルギーおよびフランスへの攻撃はバーゼル地域を数週間の間ドイツ国防軍の進軍地域となるかもしれない危険な状態へと陥れた。当時ドイツがフランスのマジノ・ラインを南における攻撃の楔としてすり抜けようとするのではないか，その場合バーゼル地域が戦域となるのではないか，と一般的に懸念されていた。5月14日には南スイスとアルペンラウム方面に向けて市民たちの混乱した逃亡活動が起きていた。BIS もまたこの逃走の波に加わった。BIS の業務所在地はグランド・ホテル隣接のセントラルバーン・シュトラッセからヴァートレンディシェン・ペイズ・デンホート Waadtlandischen Pays d'Enhaut のシャトー・ド・オックス Chateau d'Oex に移された。BIS 事務所の250キロメートル離れたアルプスの保養地にある豪華ホテルへの引越しには約2週間がかかった。経営陣と職員は多数のホテルや山荘に宿泊し，他方マッキトリックはベル・ヤコブソンの家族といっしょに近くにあるロウジュモント城に住んだ。1940年5月末には BIS はシャトー・ド・オックスで業務を再開することができた。

BIS の新住所から谷の内側に向かって二つの村を越えたところ，フランス語・ドイツ言語境界地帯のグシュタート・エネットにスイス銀行（SBC）はこの5月パレス・ホテルの大ワイン・ケラーを緊急の金保管所として改造した。この新しい保管所はチューリッヒの同社の本社所在地から大量の在庫を受

け入れることを目的としていた。BIS 総裁マッキトリックはこれを聞いた後で SBC 頭取のパウル・ヤベルグ Paul Jaberg にベルンのスイス国立銀行にある BIS の金を受け入れる余地はこの保管庫にはないものかと問うている<sup>1)</sup>。

BIS のシャトー・ド・オックスへの住所移転も SBC のグシュタートにおける緊急保管所の設置も、数週間後リュトリヴィーゼ・アム・フィアヴァルトシュテッターゼー Ruetliwiese am Vierwaldstaettersee でスイス軍司令官のアンリ・ギザン将軍 Henri Guisan が布告することになる「アルペンレデュート」を先取りするものであった。フランスの崩壊の直後ギザンは彼の最高将校たちにそこで、スイス軍の本隊は平時体制に切り替えると声明した。今後は縮減されたスイス軍を以ってスイスのアルペン地域をあらゆる攻撃者から最後の血の一滴まで守りきると宣言した。これは軍隊によってもはや防衛されないスイスの中腹地域の事務所や工場への数十万の労働力の放免を意味していた。こうした政策はベルリンでは次のこと以外には解釈されようがなかった。すなわち、スイスのドイツ第三帝国との経済的な協力の用意を示すシグナルである。

ドイツのこうしたスイスについての協力の主な関心は、1940年夏つまりフランスの崩壊後という時期においては軍需物資の供給というドイツがすでに占領地域や同盟諸国から調達可能なものではなくて、スイスをドイツ戦争経済にとっての不可欠な金融拠点として役立てることにあった。ヒトラーは、外国為替管理なしに自由な取引ができるハード・カレンシーを持ったひとつの中立的金融拠点を必要とした。国際金融世界の信頼を得ている経験豊富な銀行を持ち、ドイツの金をその源泉について多くの質問なしにハード・カレンシーと交換してくれる意志のある中央銀行を持ち、ライヒスバンクのためにその国際的な手足として面倒な国際業務において役立ってくれる BIS を持っている、そんな金融拠点である。そんなところは1940年夏のヨーロッパにおいてはスイスにしかあり得なかった。もしナチ・ドイツがスイスをも占領したなら、そしてそれによってハード・カレンシーであるスイスフランも破壊したなら、ドイツの他

1) McKittrick Collection (以 FMC と略記), Brief McKittrick an Paul Jaberg, 29. 5. 1940.

のヨーロッパ諸中立国および海外への最後の窓も閉ざされてしまったであろう。そうなれば、スイスを超えておこなわれている、こうした地域からの戦略的な軍需物資の輸入のためのドイツの支払い往来がストップし、前述のようなポルトガルのタングステン、ブラジルの産業用ダイヤモンドや多数の軍需に不可欠の原料の調達がとまってしまうという結果を伴ったであろう<sup>2)</sup>。

こうした状況の下では、5月14日にはバーゼルの市民を混乱した逃走へ追いやっていたパニック的な不安はまもなく忘れられ、都会人たちが再びアルプスから降りてきたのも驚くことではなかった。BIS もまたすでに1940年9月のうちにそのオフィスをシャトー・ド・オックスからバーゼルのセントラルバーン・シュトラッセに戻した。

BIS 総支配人ロジェ・オブワン Roger Auboin は1939年10月から一時バーゼルを離れていた。1939年11月はじめにフランス政府は彼をジャン・モネ Jean Monnet を委員長とした「計画委員会」の総合書記に任命していた。ドイツ軍を前にした逃亡の中でフランス首相ポール・レイノーは1940年6月14日トゥルーズでこの短命の英仏委員会を再び解散し、それでオブワンは独仏休戦協定の後「バーゼルに戻る決心をした」<sup>3)</sup>。ロンドンへの亡命を決めたシャルル・ドゴール、ジャン・モネその他とは異なっただけでロジェ・オブワンはドイツ＝フランス休戦協定の後ドイツ人との協力の方向に転換したのである。かれの BIS 総支配人としての職務再開は問題なく経過し、その後彼は BIS とのコンタクトを決して放棄しなかった。第二ビューロー（参謀本部の情報部門）の特別許可証をもって彼は定期的にバーゼルに滞在した。1940年7月末における BIS への帰還の際にはすべては元どおりになっていた。ただロジェ・オブワンが、いまや第三共和制の「誇りある」フランス銀行を代表しているのではなく、ナチ・ドイツと協力しているヴィシー政府のフランス銀行を代表し

2) 拙稿「第二次世界大戦期の国際決済銀行(3)——大戦中 BIS の基本業務——」【経済論叢】第161巻5・6号、参照。

3) MC, Roger Auboin, Note sur la BRI pendant la guerre, 10. 10. 1944.

ているのだということを度外視すればである。

他方1940年夏マッキトリックはわずかならぬ時をバルト地方の通貨金の事件に費やした。バルト地方はマッキトリックの時代の BIS では常に総裁の管轄領域となったが、これはかれが1935年以来社長をしていたノルディッシェ・セルロース（バルブ）工業社のあるエストニアの首都ラヴァル（タリン）との深い結びつきに関係があった。バーゼルの新事務所における第一日目にマッキトリックは BIS のタリンにあるエストニア銀行関係についての報告を求めている<sup>4)</sup>。1940年1月16・17日のベルリンのライヒスバンクへの就任挨拶訪問とつなげてかれはエストニアのラヴァル（タリン）にも旅行し、そこで同バルブ工場を訪れた。

1940年7月13日と15日赤軍はバルト地方を占領した。数日後 BIS は3つの同文の電報を受け取った。それらは、ラヴァルのエストニア銀行、カウナスのリトアニア銀行、リガのラトヴィア銀行から来ていた。3つのバルト地方の中央銀行はかれらの BIS にある金保管庫を直ちにソヴィエト連邦国立銀行に移すよう要求した。エストニア銀行は約3.5トン、価値にして約1800万スイスフランをたいていは金で BIS に預金していた。その金保管庫はロンドン及びニューヨークにあった。リトアニア中央銀行は約700キログラムの金、価値にして300万スイスフランをロンドンに持っており、またラトヴィアの中央銀行は数キログラムをベルンの保管庫に預けていた<sup>5)</sup>。

チェコスロヴァキアの金のライヒスバンクへのとどこおりない移転とは異なって BIS はバルトの金の際には向きを変え、これをソヴィエトの侵略者には提供しなかった。金はその代わりにブロックされた。1941年11月ドイツ国防軍がレニングラードへの進軍の際にバルト地方も占領した時、ライヒスバンクはこのバルトの金を獲得しようと試みた。ふたたび BIS は拒否した。バルトの金はロンドン及びニューヨークにあり、ドイツの権力領域の外である。もし

4) MC, Expose Lindenau, Beziehungen der BIZ zur Festi Bank, 12. 1. 1940.

5) MC, Relations avec les pays baltes, von Rechtsberater Felix Weiser, 15. 7. 1940.

ライヒスバンクが BIS に金を供給することを強制したなら、BIS はベルンにある自分自身の在庫を減らすことになり、こうしてドイツは自分自身の肉を切ることになったであろう。

1944年中頃赤軍がバルト地方をドイツの占領から再「解放」した後で BIS はこの金の提供を三たび拒否した。その後この争いの対象になったバルトの金は数十年間忘れられた。50年後にもう一度後劇がやってくるまでである。1992年の春に再び復活したバルト諸国の中央銀行はかれらの BIS にたいするかつての加盟権とともに彼らの古く持っていた金をやっとなり返してもらった。

#### マッキトリックの「善意の旅」

すでに述べられたニューヨークでの金融取引にたいする許可制度に伴う諸問題の結果マッキトリックは1940年秋から BIS のアメリカ合衆国に対する関係を改善するために組織的な試みを行なった。その際ウォール・ストリートの国際的な民間諸大銀行の彼に対する支持は保証されていた。そしてベルンにおけるアメリカ大使リーランド・ハリソンとの規則的な会話のおかげでマッキトリックはアメリカ国務省の中にもある程度の共感を当てにすることができる事を知っていた。国務長官コーデル・ハルは BIS にたいして少なくとも敵対的ではなくアメリカにおける諸中立国の資産の凍結問題に関しては寛容な政策の支持者として通っていた。これと反対にアメリカ財務省における BIS 反対者たちは連邦準備制度総裁の BIS に対する態度にも否定的な影響を及ぼしていた。

ヘンリー・モーゲンソー財務長官が BIS についてすでに1933年のかれの就任以来表明していた不信心は、すでに述べたように BIS が彼の政治的敵対者であるニューヨークの国際銀行家たちの道具であるという評価に根差していた。1935年から戦争勃発にいたるまでかれはバーゼルに送った使者のマール・カクラン Merle Cochran のもたらす情報にもある程度の関心を示していた。この情報源泉が1939年夏に監査役会会議の終焉後に尽きてしまった後、モーゲンソーにとっても BIS のさらなる存続の正当化理由もなくなった。マール・カ

クランは南アメリカ部門のあるポストに異動していた。その同時期に確信的な BIS 敵対者であるハリー・デクスター・ホワイト Harry Dexter White が財務省通貨部門の幹部からモーゲンソーのスタッフ長及び財務副長官に昇進していた。

ハリー・D・ホワイトが1940年夏のフランスの崩壊後にモーゲンソーに宛てて作成した世界情勢に関する基本原則ペーパーがある。これがかれらの BIS に対する敵対の政治的理由を明らかにしている。ホワイトはそこで4つの世界強国から出発している。すなわち、アメリカ合衆国、ドイツ、日本、およびソ連である。彼は日本を軍事的には攻撃的で領土的に拡張主義的と特徴づけ、ソ連をイデオロギー的には攻撃的でしかし膨張主義的ではなく完全に国内志向的であると、最後にドイツをアメリカにとっての最も危険な敵としている。ドイツ第三帝国はソ連と日本の最も危険な要素を統合している。すなわち、領土的に拡張主義的で、電撃戦に成功しており、イデオロギー的にも攻撃的であるというわけである。ホワイトはアメリカ合衆国の完全に新志向の外交政策を要求した。すなわち枢軸諸国に対する公に宣言する非難政策である。「アメリカはファシズムに対する民主主義諸国の闘争の主導権を握らなくてはならない。」<sup>6)</sup> ソ連への接近とベルリン・ローマ枢軸と日本との間を裂くことを結びつけるべきだ。ホワイトはアメリカ合衆国国務省を、英仏にふきこまれた対独宥和政策を追求するチェンバレンとグラディエの仲間になっていると非難している。こうした世界像のなかにはナチズムとの均衡を弁護する BIS にとっての場所はない。ホワイトは明確に BIS の解散を意図したのである。

遠く離れたワシントンにおける BIS 敵対者ハリー・D・ホワイトの昇進と BIS の友マール・カクランの退場についてマッキトリックは1940年から41年にかけての冬には正確なことは何も知らなかった。しかし BIS 銀行部門のニューヨーク連邦準備銀行との間の問題および米国財務省の下にある外国資産管理局との厄介事は十分承知していた。これらを除去するため及びヘンリー・

6) Harry D. White Papers, Mudd Collection of Manuscripts, Princeton University, Princeton, N. J., Box 12, in G. Trepp, *et al.*



モーゲンソーとの関係を直接のコンタクトによって改善するため、マッキトリックは1941年の最初の数週間の内の何らかの時点でアメリカ旅行を決意した<sup>7)</sup>。この「善意の旅行」の準備のため彼は3月の末ひとつの基本原則ペーパーをアラン・スプロウル Allan Sproul, ニューヨーク連邦準備銀行ハリソン総裁の後継者、に送った。その中でマッキトリックは BIS のニューヨークにおけるドル預金のあらゆる個々の取引のための許可の官僚的義務の導入による機能阻害を非難している。マッキトリックは次のように言う。世界貿易はドルを必要としている。世界的規模で受け入れられているそれ以外の唯一の自由通貨はスイスフランである。しかしこの小国の通貨は限定された量ゆえにドルに代わるものではない<sup>8)</sup>。

ライヒスバンク総裁ヴァルター・フンクはマッキトリックのアメリカ行きのプランに賛成したが、もちろん不在の期間はスイスの代理人を決めておく必要があるとした<sup>9)</sup>。スイスにおけるアメリカ大使リーランド・ハリソン Leland Harrison からマッキトリックは彼の旅行計画に対する支持を得た。ハリソンは国務省をこの訪問について納得させ、マッキトリックに1941年8月中頃のリスボンからアメリカへの急便航空機の席を調達した<sup>10)</sup>。

しかしイングランド銀行は BIS 総裁のアメリカ訪問に同意しなかった<sup>11)</sup>。イングランド銀行オットー・ニーメイヤー卿にとって見ればただアメリカ市民のマッキトリック、その統合力と能力において彼の持っている信頼性のみが BIS の中立性の保証なのであった<sup>12)</sup>。マッキトリックが留守をすれば、BIS はドイツ第三帝国に支配される機関になってしまうだろう。二人の総支配人口ジェ・オブワンとパウル・ヘヒラーをイングランド銀行は決して信頼しなかつ

7) MC, Brief McKittrick an Niemeyer, 4. 8. 1941.

8) MC, Brief McKittrick an Allan Sproul, 17. 4. 1941.

9) MC, Memo Emil Puhl an McKittrick, 1. 5. 1941.

10) MC, Brief McKittrick an Niemeyer, 4. 8. 1941.

11) MC, Brief McKittrick an Bundespräsident Ernst Wetter, 26. 6. 1941.

12) Franklin D. Roosevelt Memorial Library, Morgenthau Diaries, 10 July 1941, Telegramm von US Botschafter Winant, London, an Morgenthau.

た。マッキトリックはニーメイヤーを心変わりさせるためにあらゆる事をやってみた。彼はライヒスバンクが持っている BIS の厳格な中立性への客観的な利益関心について書いている。なぜならかれらは BIS を彼らの戦後プランの中で重要な役割を割り当てているからだ、とマッキトリックは強調した。ライヒスバンクは過去二年間において BIS に対して常に忠実であり、営業的には完全に正しい態度を保持していると。しかしながらニーメイヤーは考えを変えさせなかった。そしてマッキトリックはこの時はついに自らのアメリカ旅行をあきらめねばならなかった。

#### BIS からアメリカへの派遣

BIS 総裁マッキトリックがかれの善意旅行をあきらめねばならなくなった数週間後に BIS 主任エコノミストのペル・ヤコブソンがカーネギー財団からアメリカへの旅費持ち研究旅行の招待を受けた。「経済平和のための委員会」での共同作業との関連でヤコブソンはそこで「ナチズム的新ヨーロッパ」における最新の傾向と発展について情報を伝えるべきとされていた。ペル・ヤコブソンは1941年11月末にアメリカに向けて出発し1942年の4月に再びバーゼルに戻ってくる<sup>13)</sup>。彼のそこでのコンタクトはウォール・ストリートの銀行家たちと大学にとどまっており、ワシントンの財務省には歓迎されなかった。ちなみに彼がアメリカ滞在中に結び付けた結合関係はペル・ヤコブソンの将来の勝者の列車への飛び乗り台を据えることになり、結局のところ1958年におけるかれの IMF (国際通貨基金) の専務理事への昇進を可能にするものであった。

## II パリ、アムステルダム、及びブリュッセル

### ——占領地域の3つの中央銀行

1940年夏には総裁が BIS の監査役会に席を得ている8つの中央銀行のうちその3つをドイツ人が管理下に置いていた。すなわちフランス銀行、ベルギー

13) Erin E. Jacobsson, *A Life for Sound Money, Per Jacobsson, His Biography*, Oxford, 1979, p. 158.

国立銀行、オランダ銀行である。3つのすべての機関の総裁が職にとどまっており、BISにおける監査役会の議席を保持していた。しかしかれらは、占領された国の通貨政策をドイツの戦争経済に従わせ、組み込むことを保証することを義務づけられているライヒスバンクからの管理官を上司として据えられているのである。ドイツによる占領の4年間フランスとベルギーの中央銀行は継続して積極的に BIS との間を往来した。オランダ銀行はそれとは違っていて、戦争終了までもはや何ら役割を果たさなくなった。

王室と政府がドイツのオランダへの攻撃の後イギリスへ亡命した一方で、オランダ銀行総裁レオナルドス・J. A. トリップ Leonardus J. A. Trip は占領されたアムステルダムにとどまった。トリップは一年の間占領者と協力した後、1941年4月1日にドイツ・オランダ外国為替境界の廃止に抗議してオランダ銀行総裁を辞職した。この方策を以ってドイツはオランダ銀行にいつでも高められたレートでライヒスマルクをグルデンに交換することを強制したのであった。言い換えれば、いまやライヒスバンクはドイツのオランダからの輸入品に対してライヒスマルクで支払うことができたのであった<sup>14)</sup>。1941年4月3日トリップはバーゼルに監査役会メンバーとしての退任を通知した。しかしマッキトリックはこれを拒否した。彼はドイツの占領者へのいかなる抗議行動も承認しようとしなかったのである。加えて新たなオランダ銀行総裁が入ることも問題が起きたであろう。オランダ・ナチ党で SS 将校のルースト・ヴァン・トニンゲン Roost van Tonningen はオランダの第三帝国への編入の支持者であった。ナチの操り人形が誇り高い BIS 監査役会に入ることは BIS の中立性を壊すことになり、これによってイングランド銀行のノーマン総裁の退任を引き起こす危険があった。ヴァン・トニンゲンを BIS 監査役会から遠ざけておくためにマッキトリックは退任した総裁トリップに BIS 監査役会メンバーとしてはとどまるように頼んだ<sup>15)</sup>。同時にパウル・ヘヒラーはベルリンのエミー

14) *Neue Zürcher Zeitung*, Nr. 869, 17. Mai. 1946.

15) MC, Brief McKittrick an L. J. A. Trip, 30. 4. 1941 und Antwort von Trip, 2. 5. 1941.

ル・プールに介入した。ライヒスバンク副総裁エミール・プールは同じくロースト・ヴァン・トニンゲンが BIS にとって意味する危険を認識していた。そしてアムステルダムにおけるオランダ銀行のドイツの管理官、ライヒスバンク理事のビューラー Bueler に介入した。ビューラーは直ちにトリップを以前と同じく BIS 監査役会メンバーにとどませトニンゲンにバーゼルにおける威信あるポストをあきらめさせる義務を負った。「もしロースト・ヴァン・トニンゲン氏が彼の主張を再び変えるべき場合は」ビューラーは「必要ならばベルリンからも影響を与えられることができる。」<sup>16)</sup> 結果としてはライヒスバンクはヴァン・トニンゲンも前の BIS 監査役会メンバートリップも両方ともバーゼルから遠ざけた。トリップが1941年11月はじめにバーゼルに旅行しようとした時ライヒスバンクは彼への許可を出さなかったのである<sup>17)</sup>。これによってオランダ銀行はバーゼルへの連絡関係を切り離された。

ドイツに占領された BIS 監査役会メンバーを持つ第二番目の中央銀行はベルギー国立銀行であった。その総裁であるジョルジェ・ヤンセン Georges Janssen は5月末におけるベルギー軍の降伏の結果フランスに向けて逃げたが最終的には6月の末にヴィシーに着いた。そこでヤンセンとベルギー蔵相カミーユ・グット Camille Gutt は以下のような見解に至った。すなわちヤンセンとベルギーの民間諸銀行が国に残り、他方でグットがベルギー国立銀行副総裁といっしょにロンドンに移りそこからベルギーの植民地帝国を統治すればベルギーの金融的利益に最大限に貢献するということである。グットはユダヤ系であり、1930年代にフラマン語系ナショナリストとワロン語系レクシストによるファシスト的な攻撃の標的となっていた。この両者はナチスにシンパシーを感じていたのであった<sup>18)</sup>。ジョルジェ・ヤンセンは最終的にカミーユ・グット

16) MC, Aufzeichnung über ein Gespräch von Paul Hechler mit Emil Puhl und Reichsbankdirektor von Wedel in Zürich, 28. 4. 1941.

17) MC, Brief Emil Puhl an McKittrick, 6. 11. 1941.

18) *Neue Zürcher Zeitung*, Nr. 166, 11. Juni 1971.

との了解のもとに1940年7月に再びブリュッセルに戻った<sup>19)</sup>。

ベルギー国立銀行はドイツの攻撃を予期してすでに1940年3月に彼らの金準備のうちの約三分の二をロンドンとニューヨークに移していた。残りの198トン<sup>20)</sup>はフランス銀行のボルドーの近くのモント・デ・マルサンにある一地方保管所に保管された。カミーユ・グットが彼の回想録の中で報告しているようにその際、この198トンはドイツのフランスへの攻撃の場合には同様にロンドンに疎開することが取り決められていた<sup>21)</sup>。6月のはじめグットはその目的のためにイギリスからコルヴェット(武装帆船)を組織し、ベルギーの金をボルドーの港に取りに行こうとした。そこで彼はしかしながらビストロ港のなかでフランス蔵相イブ・ボウティリール Yves Bouthillier から、ベルギーの金は既にダカールに向けて輸送された後だということを聞かなくてはならなかった。

「これによってフランス銀行は約束を破ったのだ。」と30年後回想録でグットは判断を下している。そしてさらに続ける。「人も知るようにフランス人はこの金を後にドイツに提供したのであった。ヴィシー政府のあらゆる犯罪の中でもこれはその最悪のものだ。」<sup>22)</sup> ヴィシー政権の蔵相イブ・ボウティリールは彼の回想録の中で約束を破ったという非難を強く拒絶する。彼はベルギーの金のダカールへの輸送をベルギーの中央銀行総裁のジョルジュ・ヤンセンがフランス銀行に金をロンドンに持って行くことを決して要求しなかったことを示して正当化する。「ヤンセンこそがベルギーの中央銀行の合法的な総裁であり、BIS から認められていた。そして BIS の総裁はアメリカ人だ。」<sup>23)</sup>

1940年5月及び6月にドイツの電撃がフランスを一撃したときフランス銀行は文字どおり最後の瞬間にフランス国家財産を確保することに成功したのだった。全部で1900トンのフランス国内の金準備はパリや様々な地方の保管所から3つの港トゥーロン、ル・ヴェルドン、ブレストに運ばれ、そこから海外に輸

19) Gillingham, John, *Belgian Business and the Nazi New Order*, Ghent, 1977, p. 25.

20) Gutt, Camille, *La Belgique au Carrefour 1940-1944*, Paris, 1971, in Trepp, a. a. O.

21) Gutt, *ibid.*, p. 62.

22) Bouthillier, Yves, *Le drame de Vichy II*, Paris, 1951, p. 156.

送された。フランス銀行は戦争前にすでに800トンの金をロンドン及びニューヨークに運んでいた<sup>23)</sup>。金の最後の積荷はブレスト港を6月18日、最初のドイツの戦車の到着のたった17時間前に発送されたのであった<sup>24)</sup>。これらの金の大部分はニューヨーク連邦準備銀行に行った。それと並んでフランス銀行はオタワの王立カナダ銀行とフランスのカリブ海の海外植民地マルティニーク島にあるフランス要塞の軍事保護地区にも保管庫を開設した。別の数百トン、そのうちには既述のベルギーの金も入っているのだが、これはフランス植民地のセネガルのダカールに向けて輸送され、そこから陸路を100キロメートルほど行ったカエス要塞に運ばれた。

1940年6月末の休戦協定の後フランス銀行総裁ピエール・フォルニールはさらに戦にとどまった。逃走の混乱した数週間の後、彼はベタン将軍のヴィシーにおけるフランス国家の成立後パリに帰ってきた。ヴィシー・ホテルに設置されたベタン政府と違ってフランス銀行の所在地はパリにとどまった。フォルニール総裁が再びクロワ・ド・ベティ・シャン通りの彼の事務所に帰ってきた時すでにライヒスバンクの管理官が据えられていた。その長はカール・シェーファー Carl Schaefer であり、かれはライヒスバンクによって廃止されたダンチヒの発券銀行の前総裁であった。かれをふたりのライヒスバンク理事ヨストとベッチャーが補佐していた<sup>25)</sup>。

ドイツ人はフランスの巨大な金儲蓄についてよく知っており、1940年7月19日ヴィースバーデンにおけるドイツ・フランス経済協定交渉の際にドイツ側の交渉主任ハンス・ヘメン Hans Hemmen はそれらの所在についての正確な情報を要求した<sup>26)</sup>。

フランス側が一ヶ月後に求められた情報を彼に提供した時、ヘメンははじめ

23) Georges Potut, *La Banque de France*, Paris, 1961, p. 189.

24) Potut, *ibid.*, p. 192.

25) Potut, *ibid.*, p. 192 f.

26) Arnould, Pierre, *Les finances de la France et l'occupation Allemande 1940-1944*, Paris, 1950, p. 199.

てフランス銀行におけるベルギーの金保管について聞いた。ただちに彼はこの金のブリュッセルへの返還を求めた。ヤンセン総裁は文書による同意を期待されたが彼はもちろん提出しなかった。ライヒスバンクからの管財人フォン・ベッカー von Becker によるあらゆる脅しにもかかわらずヤンセンはベルギーの通貨金の提供を彼の署名で合法化することを拒否した<sup>27)</sup>。これに対してヘメンは最後通告の形でヤンセンの同意なしにベルギーの金の引き渡しを要求した。ヴィースバーデンにおけるフランス人代表は屈服し、ベタン将軍も彼の首相ピエール・ラヴァルも合意した。このヤンセンの了承なしに行なわれる金の供給ということにフランス銀行総裁ピエール・フォルニールはまったく同意できなかった。ピエール・フォルニールのような伝統的な学派の中央銀行家にとってはベルギー国立銀行との保管契約をやぶることはひとつの所有に対する大罪を意味するものである。1940年9月末にベタン将軍は原理に頑固な総裁を解任し、彼をフランス国鉄 SNCF の監査役会会長のポストに異動させた。フランス銀行の新たな総裁で自動的に BIS 監査役会メンバーになったのは同副総裁であったイブ・ブレル・ド・ボワサンジュ Yves Bréart de Boisanger であった。こちらはベルギーの金をヤンセンの了承なしにブリュッセルに供給する用意ができていたのである<sup>28)</sup>。

ベタン将軍のこの同意の政治的背景は1940年10月24日にモントワールで行なわれた彼のヒトラーとの会談であった。将軍にはベルギーの金はフランスには何らコストのかからないフューラーへの贈り物としてまさしくちょうどよかったのである。ほとんど2週間にもならない内に1940年11月6日にはベルギーの金の最初の2.4トンがセネガルからサハラ砂漠を越える航空便でマルセイユに入り、そこからベルリンに向けての貨物列車に積み替えられた<sup>29)</sup>。二番目の金輸送はサハラ砂漠を飛行機ではなく鉄道、自動車、およびらくだの背中に載せ

27) Arnould, *ibid.*, p. 246.

28) MC, Note McKittrick about Discussion with Auboin on Belgian Gold, 17. 3. 1943.

29) Arnould, *op. cit.*, p. 250.

られて横断し、1941年3月半ばにやっとマルセイユについた。ヴィシー政権下のアフリカ植民地における太守たちは、ベタン将軍に対してある程度の独立性を示そうとしていたが、この金のダカール・ベルリン・ラリーについても多くの時間をかけさせた。その結果198トンの金の最後の積荷がベルリンに着いたのはやっと1942年5月26日であった<sup>30)</sup>。

1941年6月における独ソ戦勃発と12月におけるアメリカ合衆国の参戦はドイツがヴィシー体制の協力によって略奪したベルギーの金の事件をすべての当事者において背後に押しやった。しかし1943年夏にこの件は再び現実性を獲得する。

他方1939年9月はじめに BIS が購入したベルギー国債の一件はベルギーの二つの国立銀行が承認された背景を描写するものである。BIS は1939年9月にアムステルダムで12.5百万グルデンすなわち（当時で）約3000万スイスフランの短期の「ベルギー大蔵省証券」を署名して申し込み、証書をこれの発行を行なったオランダ銀行に預けた。この国債が1940年5月29日に償還期限が来た時ベルギー軍はちょうどドイツ国防軍に降伏したところだった。ベルギー国債の償還が危険にさらされているという懸念からパウル・ヘヒラーはライヒスバンク理事のエミール・プールに介入して、この有価証券のアムステルダムからベルリンを経てバーゼルまでの送還を手配するように依頼した。プールの介入と同時にベルギーの BIS 理事マーセル・ヴァン・ジーランドは亡命ベルギー政府にしつこく付きまとった。彼はパリ、トゥール、ボルドーからヴィシーへの冒険的な旅行をおこない、そこでベルギー国立銀行から BIS 資産の払い戻しを達成するためにあらゆる手段を用いた<sup>31)</sup>。

ヴァン・ジーランドはその際何も達成することができなかった。すでに述べたようにベルギーの蔵相カミーユ・グットと中央銀行総裁ジョルジェ・ヤンセ

30) Zur abenteuerlichen Reise des belgischen Goldes von Kayes nach Berlin siehe : Werner Rings, *Raubgold aus Deutschland*, Zürich, 1985, S. 26 f.

31) MC, Brief McKittrick an Leon Fraser, 21. 12. 1940.



ンがヴィシーで相互に分かれた後、バーゼルに帰ったマーセル・ヴァン・ジーランドはロンドンのカミーユ・グットに対して少なくとも国債の利子を取りたててを試みた。しかしながらグットはあらゆる支払いを拒否した。グットはバーゼルへの手紙で書いている。「第一に BIS はドイツによってコントロールされている。それはベルギー国債のアムステルダムからベルリンを経てバーゼルへの供給に際してのライヒスバンクの協力によって改めて実証されている。第二にベルギー亡命政府の構成員としてわたしはドイツに支配されている BIS と取引をすることを禁じられている。」<sup>32)</sup> マッキトリックはこのグットの非難に対して彼の返電の中で次のような議論をもって返した。「もし連合国が BIS を実際に敵によって支配されている機関と見なしているなら、イングランド銀行総裁はわれわれの監査役会から直ちに立ち去るはずである。」<sup>33)</sup> 何回かのやり取りの後グットとマッキトリックは最終的にベルギー国債の償還を1941年1月にニューヨークで調整する試みで一致した。BIS の代表者としてマッキトリックは前 BIS 総裁のレオン・フレイザーにそれを申し込んでいる。

グットとフレイザーの交渉はしかし成果なく終わった。グットは BIS の資産を確かに原理的には承認するが、しかし利子は戦後になって支払いたい。というのは、グットによれば「BIS に今日利子を支払うことはこの銀行を支配している敵を強化することを意味する」からである<sup>34)</sup>。BIS 代理者レオン・フレイザーはグットの拒否をバーゼルに知らせマッキトリックから折り返し返事を受け取った。その中で BIS 総裁はライヒスバンクを激しく擁護した。「わたくしの就任期間中ライヒスバンクは一度たりとも彼らの BIS における権利の悪用という罪を犯したことはない。そして彼らはつねにきちんと利子を支払っている。戦後の時期に関してもライヒスバンクは BIS の枠組の中で国際的な世界通貨関係の協調的な調整を作ろうと努力している。」<sup>35)</sup>

32) MC, Brief McKittrick an Leon Fraser, 21. 12. 1940.

33) MC, Brief McKittrick an Leon Fraser, 21. 12. 1940.

34) MC, Brief Leon Fraser an McKittrick, 18. 4. 1941.

35) MC, Brief McKittrick an Leon Fraser, 13. 5. 1941.

亡命蔵相のグットがベルギー国債への利子支払いを拒否した後、ヴァン・ジーランドは BIS の資産を占領されたブリュッセルのベルギー蔵相から回収することを試みた。同時にパウル・ヘヒラーはライヒスバンクとブリュッセルの国立銀行のライヒスバンク管財人の支援を求めた<sup>36)</sup>。ついに利子はブリュッセルから1941年10月18日に支払われた<sup>37)</sup>。

ロンドンのカミーユ・グットは BIS とブリュッセルのベルギー国立銀行との合意を認めなかった。1941年11月28日に彼はバーゼルに連絡し、国債についてはロンドンの亡命ベルギー国立銀行総裁の下においてのみ交渉されることができるとし、マーセル・ヴァン・ジーランドのロンドンへの派遣を求めた。この無理な要求をマッキトリックは利子はブリュッセルのベルギー国立銀行によって合法的に支払われたと指摘することによって拒否した。そしてついではながらベルギー国立銀行の所在地がブリュッセルからロンドンに移されたとは初めて聞いたと書いた<sup>38)</sup>。

ロンドンにおける亡命中央銀行の設立によってカミーユ・グットは彼が1940年7月にヴィシーでジョルジュ・ヤンセンとの間で取り決めた統一戦術を破ってしまい、これによってベルギーの最高金融界の国内ウイングと国外ウイングは分裂してしまった。ドイツと協力しているベルギーの金融人の大部分、たとえばソシエテ・ジェネラレ・ド・ベルギクのアルバート・ガロピンやソシエテ・ベルゲ・ド・バンクの A. E. ヤンセン、はカミーユ・グットとの分裂後もさらにブリュッセルに残った。他方、高級官僚のモーリス・フレールなどは1942年のはじめに連合国陣営に転換することになる。フレールは1941年12月には占領されたベルギーの代表者としてバリのフランス銀行との交渉を指導していたのであるが<sup>39)</sup>。1944年9月におけるベルギーの解放ののちモーリス・フ

36) MC, Notiz Hechler vom 18. 9. 1941.

37) MC, Brief McKittrick an Leon Fraser, 12. 12. 1941.

38) MC, Brief Camille Gutt an McKittrick, 28. 11. 1945.

39) MC, Memo de Roger Auboin de son voyage a Vichy, Clermond-Ferrand et Paris, 12. 12. 1941.

レールは再統一されたベルギー国立銀行の総裁になり、そして1946年には BIS 監査役会によって BIS 総裁に選ばれることになる。

二つのベルギー国立銀行は BIS に大きな問題を生み出した。だれが BIS 監査役会でベルギーのメンバーとなるのか？ ロンドンからの新しい人、ジョルジェ・テウニス Georges Theunis か、それともブリュッセルからの、1941年6月にドイツの軍事政府がなくなったジョルジェ・ヤンセンの後継者として指名したアルバート・ゴフィン総裁 Albert Goffin か？ 両人のうち誰が投票権を持つか、また BIS へのベルギー出資金の配当を誰が受け取るのか？

1941年12月末ライヒスバンクのベルギー国立銀行管財人フォン・ベッカーはマッキトリックへの手紙の中で、合法的なベルギー国立銀行の総裁は相変わらずただアルバート・ゴフィンだけのはずだと書き留めた。そしてゴフィンのみがベルギー国立銀行のために BIS との業務を締結する権能を与えられていると書いた<sup>40)</sup>。ドイツのこの権力者の言葉の後でマッキトリックは何らかの方策を思いつかねばならなかった。両機関のうちのひとつだけを承認することは枢軸国に対するかあるいは連合国に対するかいずれかに対してある種の侮辱を加えることを意味する。どちらもマッキトリックは欲しなかった。BIS の法律顧問のフェリックス・ヴァイザー Felix Weiser によって出された専門家意見も方策なしというに等しかった。それは次の言葉において頂点をなしている。

「この問題（ベルギーの二つの中央銀行という問題）は当面未解決のままにしておかれねばならない。」<sup>41)</sup> これに対してマッキトリックは何のためらいもなく両方のベルギー国立銀行を承認(!)し、両方の総裁を BIS 監査役会に受け入れ、両方の機関にベルギーの資本部分に対する配当金を支払ったのである。BIS の両機関との間の業務通信もいつものやり方で続けられた。ブリュッセルとロンドンの両ベルギー国立銀行は BIS によって保有されているベルギー国債の利子支払いにおいてはお互いに分け合った。1943年9月19日まではブ

40) MC, Brief von Becker an McKittrick, 16. 12. 1941.

41) MC, Gutachten Felix Weiser, 4. 2. 1942.

リュッセルのベルギー国立銀行が払った。1944年のはじめからはロンドンのベルギー国立銀行がニューヨークの封鎖口座で支払った。戦後最終的な精算が行なわれた<sup>42)</sup>。

1941年11月マッキトリックはブリュッセルに新設された有価証券発行銀行に BIS におけるスイスフラン口座の開設を許可した。この許可は占領地域における戦争指導権力の作った新たな機関との業務関係の形成を禁じていた BIS の自分に課した中立原則に違反するものだった。有価証券発行銀行はすでに述べたようにベルギーのナチ協力者によって1940年秋にドイツの占領費を支出する目的のために設立されたのであった。1941年12月7日にアメリカ合衆国が参戦した後ではマッキトリックはこの口座開設のことでゆっくりとしかし確実に足の冷える思いがし出した。というのはこれによって彼は枢軸国に国際的な支払方法上より効率的な手段を与えることで枢軸国の金融資源を強化することになるわけだからである。結局1942年2月24日にマッキトリックはベルギー有価証券発行銀行に彼らの BIS 口座のベルギー国立銀行のそれとの融合を求めた。有価証券発行銀行の最後の支払いはブリュッセルの冬期支援への7万スイスフランの送金であった<sup>43)</sup>。

### III 「ヨーロッパ要塞」のための多角的決済機構

「占領された地域は政治的、経済的、および軍事的にドイツに完全に依存するようにされねばならない。」<sup>44)</sup> ドイツ海戦指導部はこのようにヨーロッパ新秩序の目標をまとめている。こうした文書は1940年夏の第三帝国においては流行していた。短期的にはナチ・ドイツのプランナーにとっては征服した地域の経済力を電撃戦のために役立てることが問題となっていた。すなわち、イギリスに対する戦闘のための補給とソヴィエト連邦の征服のための完全な兵器庫の形

42) MC, Proposition pour Gutt sur bons belgiques de Auboin et van Zeeland, 5. 1-. 1942.

43) MC, Auboin und Hechler an Banque Nationale de Belgique, 14. 3. 1942.

44) Gruchmann, Lothar, *Nationalsozialistische Grossraumordnung*, Stuttgart, 1962, S. 76.

成である。長期的にはナチの経済計画は広域経済圏 *Großraumwirtschaft* の概念、すなわちミュンヘンの将軍で地政学者のカール・ハウスホーファー Karl Haushofer が既に1920年代のはじめから展開していた考え方に基づいていた<sup>45)</sup>。ハウスホーファー名誉教授にとってはアングロサクソンの支配する自由主義時代はすでに終わった。自由貿易と海外への植民地拡大の政策は過去のものとなり、ヨーロッパの将来はヨーロッパ外の植民地の搾取と国際自由貿易ではなくて自給的大陸ヨーロッパの権力ブロックとその内部需要の開発に存する。こうした経済的世界観は、当時ミュンヘンにおいて無名の国防軍情報兵から国民的な政党指導者へと上昇しつつあったヒトラーの攻撃的拡張主義にも通じていた。

ライヒスマルクもまた当然のことながら新ヨーロッパのための大計画作成に携わっていた。その礎石は総裁のヴァルター・フンクが1940年7月25日に「ヨーロッパの経済新秩序はドイツに最大限の経済的現実性と最大限の物質的生活水準を保証するものでなければならない」とする基本演説で置いた<sup>46)</sup>。副総裁のエミール・プールがライヒスマルクの政策の具体的な目標を定義付けた。「ライヒスマルクが新ヨーロッパにおける主導的な通貨(外国為替)として多角的清算機構の基礎とならねばならない。」<sup>47)</sup> 古典的な勝利者の処方箋、すなわち敗者に対外経済上の支払手段として自身の通貨を強制することを以って、ドイツは生産するより多くを消費することができる状態に置かれるべきであった。さらに外国の商品を自ら印刷したライヒスマルクで支払う特権が多角的清算機構の技術によって拡大されるべきであった。多角的清算(*multilaterale Clearing*)、とゲッベルスによって強制的同一化されたドイツの経済新聞における外国語敵対的な言語規制が自ら名づけたわけだが、これは国際的な金融の流れの諸中央銀行の下での集中化に他ならなかった。当該諸国の輸出入は直接に外国のその都度の貿易相手に対して外国為替で支払い・受け取りを行なうのではな

45) Milward, Alan, *The New Order and French Economy*, p. 24f.

46) Shirer, William L., *Berlin Diary*, New York, 1984, p. 460.

47) *Deutsche Allgemeine Zeitung*, Berlin, 6. Nov. 1940.

くて、彼らの中央銀行を通じて国内通貨で処理することになる。諸中央銀行はヨーロッパ共通の清算所で外国貿易の総計的な差額のみ清算する。諸国民の通貨の換算にはすべての国が同一の参考通貨を利用する。差額ないし残高の清算はひとつの中央の清算勘定において信用の受け入れあるいは保証を通じてか、または外国為替ないし金取引を通じて行なわれる。広域ヨーロッパの多角的清算のためのセンターとしてライヒスバンクはベルリンのドイツ清算勘定を利用した。ここは最高数百人の職員を働かせていた。残高清算のための決済通貨はライヒスバンクによって確定された高められた公的レートでのライヒスマルクであった。それとやらんでナチの服務規定は清算債務の金取引による決済も許可した。ライヒスバンク総裁は1940年の夏にベルリンで、新ヨーロッパの通貨システムにおいては金は何らその位置を持たないと公式に宣言したが、ナチス・ドイツもそれを完全に放棄しようとしたわけではなかった。金本位制におけるような絶対的な通貨アンカーである代わりに、この場合には金は固定価格を持った標準的な商品として機能すべきであった。

清算勘定の構成員基準に関してはナチズム的指導者原理を義務づけられたライヒスバンクが常とは違う民主性を自ら示した。占領地域に対しては当然強制的な加盟が適用されたが中立国については参加は自発的意志によっていた<sup>48)</sup>。そこで例えば包括的な戦争中のスイス・ドイツ間貿易の大部分は多角的清算によるのではなく、二国間の清算協定を通じて処理された。

占領された地域にとっては、少なくとも書類上は、ベルリンの清算勘定への強制的構成員化は多角的清算機構を意味していた。これによってひとつの国は他の国に対する債権を第三国からの商品の支払いに使うことができる。例えば(デンマークの視点から見た)例で言えば、こうなる。ノルウェーのデンマークに対する輸出とデンマークのベルギーに対する供給はベルリンの清算勘定を通じて一定のライヒスマルク換算レートを基準として決済される。このことはデンマークにライヒスマルクで換算されたベルギーへの商品輸出による貸し金

48) *Frankfurter Zeitung*, 1. März 1941.

を以て同様にライヒスマルクで換算されたノルウェーからの商品輸入の債務を相殺することを可能にする。

ドイツの民間大銀行にとっては国家(ライヒスバンク)によって組織された、多角的決済のやり取りは両刃的なことがらであった。一方においては国際的な支払い連鎖の中での決済通貨としてのライヒスマルクの強制はドイツの諸銀行に利益の上がる新しい業務をもたらす。他方においては国家的な中央決済は外国貿易において民間の金融サービスをついによけいなものとし、それをもって外国貿易金融という長期の儲かる業務から諸銀行を排除してしまう脅威があった。ドイツ銀行取締役のヘルマン・ヨゼフ・アプス Hermann Josef Abs は当時次のことを強調していた。個々の国の清算残高は即時の対抗供給によって決済されるのではなくて、短期、中期、長期の信用という形でそのままにしておかれるべきだろう。信用供与者としてアプスは何十年もの間外国貿易金融に携わってきたそしてその生業をもっともよく理解している民間ドイツ銀行を推薦する。信用供与者としての「輸出為替の割引のための国家的機関の創出という提案」をアプスは拒否する。ドイツ銀行にとっての利益を制限する国家の競争者を彼は欲しないのである。さらに「そういう特別機関はドイツの信用銀行がヨーロッパ的規模で彼らのライヒスバンク手形に金融手段としてのひとつの主導的役割を創出しようとしているあらゆる努力を挫折させてしまうことになるであろう」と言う<sup>49)</sup>。ライヒスバンク副総裁エミール・プールはヘルマン・ヨゼフ・アプスによって非難された決済システム内での民間諸銀行の信用装置の差別をよく認め、戦争に勝利した場合のその弊害の除去を約束した<sup>50)</sup>。

ドイツの銀行家サークルでのヨーロッパ決済組織についての議論は1940年の秋には BIS にも広がっていった。1939年10月にいったんバーゼルを離れフランス崩壊後の1940年7月に再び戻ってきたフランス人の BIS 総支配人ロジェ・オブワンはライヒスバンクのこの景気のよいテーマに際し手柄を立てね

49) *Europastrategien des deutschen Kapitals*, Hrsg. Reinhard Opitz, Köln, 1975, S. 797, in G. Trepp.

50) Die Staatsbank, Berlin, Ausgabe vom 23. Juni 1940.

ばならなかった。こうしてレッセ・フェール資本主義とオーソドックスな金本位制の支持者として知られたフランス人がこの国家介入主義的な「国際的支払方法としての多角的決済」という方法についてのひとつの研究報告を書いた。これはベルリンでも関心を持ってよく知られるようになった<sup>51)</sup>。

BIS 主任エコノミストのペル・ヤコブソンはこの多角的清算方法の諸問題を取りわけ精力的に研究した。彼の研究報告書『実際の通貨問題と BIS』(1940年10月17日)のなかでヤコブソンは関連した時代のトレンドを彼の観点から次のようにまとめている。「来るべき戦後の国際通貨体制はまだ十分な確実性をもって評価することはできない。……しかしもちろんいくつかは既に今日において考察の俎上に載せることができる。すなわちそのひとつはこんにち多数の強力なサークルから支持されている一政策である広域経済圏の形成への傾向にほかならない。この傾向が将来の発展の基礎となるであろうことは確実と見なしていいだろう。ライヒスマルク・ブロックと並んで円ブロックがアジアに姿をあらわし、くわえてスターリング・ブロック、ドル・ブロックがあり、それにソ連はひとつの通貨ブロックを形成していると見ていいだろう。これらすべては個々には戦争がどう経過するか依存しているだろう。これらのブロック内の通貨技術的問題、例えばそれぞれの主導通貨あるいは信用関係、と並んで、いまやこれらのブロック相互間の関係におけるいくつかの中心的諸問題も現れている。すでにしばしば述べられているのは、アウタルキーを志向して努力している広域経済圏も外国貿易を排除しないだろうということである。その反対である。影響力あるドイツのサークルはアウタルキー的な国民経済の基礎の上での外国貿易の発展を展望しているのである。たとえばアンドレアス・ブレデール教授は彼の論文『いわゆる貿易障害と世界経済の新たな建設』(『世界経済アルヒーフ』1940年9月30日)のなかで『さまざまな広域経済圏は秩序ある通貨関係にひとつの共通の利益を持っている』と述べている。」ヤコブソン・メモは次のコメントを持って締めくくられている。「もしスイスが現

51) Zentrales Staatsarchiv Potsdam, Bestand: Dt. Reichsbank. Sachkartei Bl. 525, in G. Trepp.



在の戦争でさらに続いて中立国にとどまるならば、金融拠点スイスはドル市場と新ヨーロッパの間の有益な回転台として役立つことができるだろう。」<sup>52)</sup>

ペル・ヤコブソンの詳論は、1930年代以来の対独宥和の精神が1940年秋のBISにおいてなお長く消えていないことを示している。イギリスの首相ウィンストン・チャーチルがイギリス国民の前で「血と汗と涙で」ナチスに対する生き残り闘争を戦わねばならないことを要求している時、BIS 主任エコノミストはアングロサクソンとドイツ広域経済圏との秩序立った通貨関係による共通の利益について語っていたのである。当時正真正銘の「対独宥和論者」であった者はまさに勢力均衡をあらゆる政治倫理より上に置いていたわけである。「ファシスト的独裁」と「自由な民主主義政体」とのそれぞれの国内政治的な相違などは BIS 主任エコノミストにとってはヒトラーの権力奪取以来重要ではなかった。それにとどまらない。「ナチズムの経済政策の技術的側面」は、1940年秋において彼から「驚嘆」の告白を引き出すことができた<sup>53)</sup>。バーゼル・ロータリー・クラブで1940年11月になされた講演の中でヤコブソンはドイツ・ライヒスバンク総裁ヤルマール・シャハトが1933年から1939年の間にナチの「経済奇蹟」を資金供給し、ドイツの再軍備を可能にするのに用いた技術を賞賛した。これに対してヤコブソンはアメリカ合衆国におけるルーズベルト政権の表面上は失敗に終わった経済政策とフランスにおけるレオン・ブルムの人民戦線政府のそれを批判した。彼はこの講演の中で1940年5月10日のウィンストン・チャーチルの利益になったイギリスのチェンバレン首相の辞任をなお嘆いた後、バーゼル・ロータリー・クラブでの詳論を次のような率直な認識で締めくくった。「ヤルマール・シャハトの下でのドイツの経済生活の方がルーズベルトやブルムの回復方法よりも正統的な原理によって指導されている。」<sup>54)</sup>

スウェーデン人の BIS 主任エコノミストが1933年から1939年のヒトラーの

52) MC, Per Jacobsson, Some monetary problems and the BIS, 17. 10. 1940.

53) Jacobsson, E. E., *op. cit.*, p. 111.

54) „Goldproblem“, Vortrag von Per Jacobsson vom 4. Nov. 1940 vor dem Rotary Club Basel, in G. Trepp.

プログラムのマクロ経済的なテクニックに対する賞賛を持つ男であったとすれば、彼の経営陣の同僚、BIS のドイツ人総支配人のパウル・ヘヒラーがナチズムをどう捉えていたかが自ずと問題になる。ヘヒラーは前にも述べたようにナチ党员であった。彼の入党申請書の日付は1940年5月8日であり、1940年7月1日に党员となっている。NSDAP 中央カード目録における彼のカードには BIS における彼のポストの記載以外には何の記入事項もない<sup>55)</sup>。スイス連邦警察のヘヒラー・ファイルにも彼が特にアクティヴなナチ党员であったとは書いていなかった。確かにヘヒラーはスイスにおけるナチ党外国組織の協会活動には積極的に参加している。例えば1944年2月3日にはナチ党チューリッヒ支部で、1944年3月24日にはバーゼルの福祉社団法人で講演をしている<sup>56)</sup>。結局のところパウル・ヘヒラーは信念のあるナチではなく、もしそうしなければ BIS における高給のポストを保持できないだろうということから1940年5月にナチ党に入党した政治的機会主義者であったように見える。

パウル・ヘヒラーの機会主義がもっともよく表されているものはナチ党员があのナチ式挨拶「ハイル・ヒトラー！」を以ってサインする BIS からライヒスバンクへの彼の2つの手紙である。BIS 総支配人の公式の BIS 便箋上でのナチ式挨拶はこの由緒ある国際金融機関の年代記の中での一つの汚点だろう。ついでながらこのことは今日までの BIS の自身の歴史叙述からは完全に排除されている<sup>57)</sup>。内容的にはこの二回の手紙の中で BIS の利益のドイツ内の場所でのライヒスバンクの助けによる遂行が問題となっていた。最初の手紙ではヘヒラーは1941年5月10日にライヒスバンク副総裁エミール・プールにベルギー大蔵省証券のブリュッセルにおける集金の支持を頼んでいる。第二の「ハイル・ヒトラー！」の署名のある手紙は1943年から44年にかけての冬のミラノのイタリア銀行の金保管庫からベルンへの16トンの BIS の金の返還に役立つ

55) Berlin Document Center, Berlin, NSDAP-Mitgliederkartei.

56) Schweizerische Bundesanwaltschaft Bern. Dossier Paul Hechler, in G. Trepp.

57) BIS 50-Jahr-Jubiläum Festschrift, *Die Bank für Internationalen Zahlungsausgleich und Basler Zusammenkünfte*, Hrsg. BIZ, Basel, 1980.

ている<sup>58)</sup>。

ナチズムの致命的ユダヤ人憎悪をナチ党员パウル・ヘヒラーは共有してはいなかった。それは少なくとも彼のジュネーブのユダヤ人国民基金のヴァイス博士に対するふるまいによって想像できる。ヴァイスはドイツの権力領域からの裕福なユダヤ人亡命者のための国際的金融取引における BIS の協力を要望していたので、1941年1月22日にヘヒラーにその旨を申し出た<sup>59)</sup>。ヴァイスの言明によると戦争勃発以来ライヒスバンクの協力で約7500万ライヒスマルクがパレスチナに運ばれたが、しかし1940年秋以降常に増大する問題に直面していた。これについては、裕福なユダヤ人はなお1941年初夏まではナチスの新ヨーロッパからアメリカやパレスチナに脱出することが可能であったということを知らねばならない<sup>60)</sup>。英国政府のパレスチナへの入国許可ヴィザのためにはアッコにあるパレスチナ銀行に1000ポンドの個人預金のある証明書の提出が必要であった。パウル・ヘヒラーはヴァイスに対し来る2月のベルリン訪問の時にベルリンとアッコの間の支払問題を話を持ち出すことを約束した。加えてヘヒラーは彼の同僚、BIS 総務のラファエル・ピロッティのヴァイスが計画しているトルコ及びパレスチナへの旅行のためのイタリア政府の通貨ヴィザの調達への協力も約束した。

日常的な反ユダヤ主義は BIS の周辺領域でも存在していた。例としてマッキトリックの合衆国スイス大使のリーランド・ハリソンへの手紙を引用しよう。「親愛なるリーランド。バーゼルのパウル・ドレフュス Paul Dreyfuss がわたくしに君への紹介状の執筆を頼んで来た。彼は確かにユダヤ人だが、しかし彼の不幸な同胞を助けている良い種類のそれだ。ドレフュスはバーゼルのオーソドックス・ユダヤ人で、ロスチャイルドやヴァルブルク（ウォーバーグ）と

58) MC, Brief Paul Hechler an Emil Puhl, 10. 5. 1941 und Brief Paul Hechler an Emil Puhl, 29. 9. 1943.

59) MC, Memo Hechler an McKittrick über Unterredung mit Dr. Weiss, 22. 01. 1941.

60) Favez, Jean-Claude, *Das Internationale Rote Kreuz und das Dritte Reich*, Zürich, 1989, S. 254, in G. Trepp.

同様何世代にもわたって銀行業務に携わって来た。パウル・ドレフュスの妻はツァーリズム期ロシアのセント・ペテルスブルクにおける死滅した銀行家王朝のグンツブルクの家系の一人だ。(中略)ドレフュスは仮に魅力的な人物ではなかったとしても尊敬すべき人物であり、君の支持を受けるに値すると思う。もしそれが大きな面倒なしに可能ならばであるが。』<sup>61)</sup>

#### ナチズムの「ヨーロッパ新秩序」における BIS

1940年12月にライヒスバンク副総裁エミール・プールはパウル・ヘヒラーに対して BIS の現在の状態と戦後におけるその将来についての覚え書きを書くことを求めた。それに応えてヘヒラーは1941年2月の始めに個人的にベルリンへ報告書を送った<sup>62)</sup>。そのなかで彼はまず BIS の現在の状態は良好であると確言した。すべての国の銀行専門家たちがバーゼルにとどまり、新総裁は業務に消熟してきた。1940年末現在の決算は戦争にもかかわらず良好に保たれており、どの中央銀行も彼らの資本部分を引き上げてはいない。ライヒスバンクはオーストリアの議決権の引き継ぎ以降 BIS の最大株主になっている。さらにヘヒラーは、スイス国立銀行総裁エルンスト・ヴェーバーと彼の前任者のゴットフリート・バッハマンを入れた委員会によってアメリカ人の BIS 総裁マッキトリックを助けさせるようにすることによってスイス国立銀行をより多く BIS の経営に参加させようとするかれの努力についても報告している。マッキトリックはこの努力のことをよく理解していた。というのは「事の成り行きからして次のことも排除できないからである。すなわち、いつの日かアメリカ政府がスイスにおけるアメリカ市民に同国を去るように勧めること、あるいはまた、アメリカ政府が BIS における総裁職を任期前に辞任するよう勧告することも考えられたからである。』<sup>63)</sup>

61) MC, Brief McKittrick an Leland Harrison, 28. 8. 1942.

62) MC, Aktuelle Fragen der Organisation der BIS von Paul Hechler vom 28. 1. 1941.

63) Ebenda.

パウル・ヘヒラーは戦後に関してはもちろん BIS の解散ではなく、BIS の組織再編を推奨した。なぜなら広域経済圏によるヨーロッパの新秩序とそれによって急速に進展する清算往来は国際的な決済における諸中央銀行のますます増大する協力関係を必然的に要求するからである。組織再編はイングランド銀行からライヒスバンクへの主導機関の交代をもたらすであろう。すべての賠償規定は無効にされるのがふさわしい。また監査役会の複雑な構造は簡潔にされるべきである。戦後の BIS の将来における主要な課題をパウル・ヘヒラーはヨーロッパの広域経済圏内には見ていなかった。そこでは多角的決済は諸中央銀行とベルリンの清算勘定所との間で直接処理されるので、BIS には何ら具体的な技術的課題が残っていないからである。そうではなく BIS にはむしろ様々な広域経済圏すなわちアメリカ、アジアなどにおけるそれとの間の媒介の役割を見ていた。ここでは清算残高の金あるいは外国為替の移転による決済において BIS の活動への大きな需要があるからである<sup>64)</sup>。

ヘヒラーはこの覚え書きを、これがベルリンでエミール・プールによって誉められて戻ってきてから後初めて BIS 総裁に見せた<sup>65)</sup>。これに対し無視されたマッキトリックはヘヒラー報告に対して手書きでこう付け加えている。「この BIS の将来についての提案はただ単にパウル・ヘヒラーの個人的な見解を表現しているだけであり、BIS 経営陣とは何ら関係がない。」<sup>66)</sup>

1941年春には多角的清算機構の方法論議についてのライヒスバンクの関心はひとまず後景に退いた。ソヴィエト連邦への攻撃の準備の過程でナチス・ドイツはかれらの戦後ヨーロッパ計画を一旦凍結させた。いまや東部における生活空間の現実の略奪が宣告されたのである。

64) MC, Die Zukunft der BIZ von Paul Hechler, 1. 2. 1941.

65) Zentral Staatsarchiv Potsdam, Bestand: DL Reichsbank, Nr. 6741, Blatt 280-284.

66) MC, Memo Hechler an McKittrick, 1. 3. 1941.

## IV マッキトリックの再選

1941年12月7日における日本のパール・ハーバーへの攻撃のあとアメリカ合衆国はイギリス、ソヴィエト連邦の側に立ち、ドイツ、イタリア、日本に対して戦争に入った。これによってマッキトリックは交戦国の所属市民となった。すばやくライヒスバンク総裁ヴァルター・フンクとイタリア銀行総裁ヴィンセンゾ・アゾリーニが新たな事態に対応した。すでに1941年12月末にはかれらは BIS との連絡の媒介者としてスイス国立銀行総裁のエルンスト・ヴェーバーを利用することで一致していた。1942年1月の末にイタリア銀行総裁アゾリーニはスイスに旅行し、マッキトリックとエルンスト・ヴェーバーにこれを伝えた。その際アゾリーニはこの方策は純粋に形式的な性格のものであり、ヴェーバーはこれに対して責任を引き受けはしないし時間をわずらわせもしない。責任は総支配人パウル・ヘヒラーが持つ<sup>67)</sup>。エルンスト・ヴェーバーは、スイス政府とイングランド銀行が同意するという条件の下でのみ枢軸諸国によって提案された連絡の仲介人の役割を引き受ける用意があると説明した。それにたいするスイス政府の同意とロンドンのイングランド銀行総裁ノーマンからの理解を得てまもなく、新たな調整が効力を発した<sup>68)</sup>。

エルンスト・ヴェーバーによる火消しが1942年2月に首尾よく終わった後すぐ、次の問題が浮かんできた。すなわち、マッキトリックの BIS 総裁の任期期限がその年の終わりにやってくることであった。ライヒスバンク副総裁のエミール・プールは1942年3月の定期的なバーゼル訪問の際、ライヒスバンク総裁ヴァルター・フンクは敵国民の市民に BIS 総裁としての承認を与えることは不可能だろうと語っていた。他方でライヒスバンクは BIS 総裁職における変化をどうしても避けたかった。マッキトリック自身困惑した。パール・ハーバー数日後彼は書簡でベルンの合衆国大使リーランド・ハリソンに、ワシント

67) MC, Schreiben von McKittrick an Marcel Pilet-Golaz, 27. 1. 1942.

68) *Schweizerische Nationalbank*, Protokoll Bankausschuss, 5. Februar 1942, in G. Trepp.

ンにおける誰かが彼の退任を求めているかどうかを尋ねた。答えは予想に反してやって来なかった。ついにパウル・ヘヒラーとラファエル・ピロッティは1942年4月末に解決策を見つけた。「最も簡単なのは次のことだ。スイス国立銀行総裁エルンスト・ヴェーバーが BIS 監査役会会長に選ばれ、銀行役員の選任が彼の専一的な権限の下に置かれることだ。」<sup>69)</sup> そうすればライヒスバンク総裁とイタリア銀行総裁は発言権を中立国スイス人のみに与え、かれは自分の権限でマッキトリックの権能を延長することができる。

マッキトリックはこの提案を直ちにイングランド銀行に伝え、折り返しイングランド銀行のオットー・ニーメイヤーはヘヒラーとピロッティによって提案された術策にたいする賛成を表明した。その際オットー・ニーメイヤー卿は、マッキトリックの再選がどんな場合でも保証されねばならないと強調した<sup>70)</sup>。2週間後マッキトリックはもう一通の手紙をロンドンから受け取った。イングランド銀行総裁のモンタギュー・ノーマンは、中立国のエルンスト・ヴェーバーの全権者への選出と並んでもう一つ別の選択可能性があると行って来た。すなわちマッキトリックの任期のあと3年の暗黙裡の延長というのである。すべての当事者は、これによって公衆におけるどんなセンセーションも避けられるのであるからこうした処置がベストであると同意するだろうという<sup>71)</sup>。ライヒスバンク総裁フンクはしかしながらノーマン総裁の提案を厳格に拒否した。

「われわれは、BIS の中立的な監査役会会長の下での存続が、敵国国籍の BIS 総裁を受け入れることにたいする、また BIS のドイツへの投資への利子支払いを常に期限を守って行なうことに対する控えめな要求であるという考えである。ドイツは BIS の中立的な指導ということのはっきりした明言を要求する。」<sup>72)</sup> ライヒスバンクのこうしたはっきりした姿勢に直面してマッキトリックは、ノーマン総裁に彼の望みは実現しないことを伝える以外には選択肢はな

69) MC, Brief McKittrick an Niemeyer, 4. 5. 1942.

70) MC, Brief Niemeyer an McKittrick, 31. 5. 1942.

71) MC, Brief Norman an McKittrick, 12. 6. 1942.

72) MC, Brief McKittrick an Niemeyer, 21. 7. 1942.

かった。

ノーマン総裁の不首尾に終わったバーゼルへの介入のエピソードには一層深い意味がある。ノーマンは1920年代以来諸中央銀行のギルドの中では自分がナンバー1だと自任していた。かれはまた当然にも BIS の設立の父と見られてよい権利を持っていた。彼の活動なしには、1930年にウォール・ストリートの J. P. モルガン商会中心の民間金融外交をヨーロッパの諸中央銀行の協力関係へと統合して行くことはできなかったであろう。さらにそれに続く1939年までの10年間の間もノーマンはバーゼルで疑う余地もなく指導的な役割をしていた。マッキトリックの再選の準備の中での出来事は、おそくとも1942年6月には BIS におけるモンタギュー・C・ノーマンの時代は決定的に過ぎ去っていたということを知らしめた。

スイスの側では外相のマーセル・ピレ・ゴラツ Marcel Pilet-Golaz が、スイス国立銀行総裁エルンスト・ヴェーバーを BIS 監査役会会長にするという枢軸諸国の望みを第一番目に伝えられる人となっていた。公式の事務手続きではヴェーバーを通してスイス蔵相エルンスト・ヴェッター Ernst Wetter がいたのであるが、マッキトリックはピレ・ゴラツを優先した。というのは彼は1941年の経過の中でピレ・ゴラツを個人的に知り、高く評価するようになったからであり、そしてこの共感に連邦評議員のピレ・ゴラツから大変良く応えられた。BIS 総裁が BIS のスイス国立銀行に対するまぶしくなった関係をスイス政府への良好な関係によって中立化しようと欲した一方で、スイス外相ピレ・ゴラツはマッキトリックとの良好なコンタクトによってアメリカ合衆国への非公式の情報経路を開くことを期待したのであった。二人の連邦評議員ピレ・ゴラツとヴェッターはすぐにスイス国立銀行総裁の BIS 監査役会会長への選出に賛成した。エルンスト・ヴェーバーはすぐにではなかったが、BIS の権能を引き受けることに対する中立政策上の懸念をも表明した<sup>73)</sup>。スイス国立銀行

73) *Schweizerische Nationalbank, Direktoriumsprotokoll vom 9. 9. 1942, 2. Halbjahr 1942, S. 798, in G. Trepp.*



の二つの上位管理機関である銀行委員会と銀行評議会が、エルンスト・ヴェーバーに、「BISの存続はスイスの今日にとっても将来にとっても過小評価できない価値を持っている」という指摘を以ってこの権能の受け入れを迫った後で、彼は最終的に譲歩した。自分自身の意思には反してそして何ら感激をもつわけではなく、スイス国立銀行総裁エルンスト・ヴェーバーはBIS監査役会会長の候補になることを承知した<sup>74)</sup>。その際彼は次のことを条件として出した。すなわち、BIS監査役会全メンバーが彼の志願を歓迎するということ、そしてマッキトリックがBIS総裁として第二期めの最初から助力するということである<sup>75)</sup>。

1942年の夏の経過の中でエルンスト・ヴェーバーから求められたドイツ、イタリア、イギリス(亡命ベルギーも含む)、フランスおよびスウェーデンのBIS監査役会メンバーたちからの同意がだんだんとバーゼルに到着してきた。1942年10月末ではただあとブリュッセルのベルギー国立銀行とアムステルダムのオランダ銀行の同意だけが欠けているだけになった。そこでパウル・ヘビラーはライヒスバンク副総裁エミール・プールの助けを借りてブリュッセルとアムステルダムをせき立てた。1942年11月24日にはベルギーのBIS監査役会メンバー、アルバート・ガロピンとアルバート・ゴフィンおよびオランダの形式上のBIS監査役会メンバーレオナルド・J・A・トリップの同意も届いた<sup>76)</sup>。

いまやエルンスト・ヴェーバーによる1943年1月1日を以ってのBIS監査役会会長職の引き受けを邪魔するものは何もなかった。これを以ってこの職は1940年5月2日におけるotto・ニーメイヤーの沈黙のうちの、また後が続かない退任以来初めて再び埋められることになった。そしてマッキトリックのBIS総裁再選も同時に決まったのである。

74) Brief des Präsidenten des Bankrates der Schweizerische Nationalbank, Prof. G. Bachman, an die 40 Mitglieder des Bankrates vom 12. November 1942, in G. Trepp.

75) Schweizerische Nationalbank, Protokoll Bankausschuss vom 26./27. November 1942, in G. Trepp.

76) MC, Telegramme Weber zur Spedition an Paul Hechler, 24. 11. 1942.